

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	塚本 正紹
<p>[論文題名]</p> <p>Acute and Subacute Toxicity In Vivo of Thermal-Sprayed Silver Containing Hydroxyapatite Coating in Rat Tibia</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年</p> <p>BioMed Research International, Volume 2014, Article ID 902343, 8 pages, 2014 (http://dx.doi.org/10.1155/2014/902343)</p> <p>著者名</p> <p>Masatsugu Tsukamoto, Hiroshi Miyamoto, Yoshiki Ando, Iwao Noda, Shuichi Eto, Takayuki Akiyama, Yutaka Yonekura, Motoki Sonohata, Masaaki Mawatari</p> <p>[要 旨]</p> <p>【研究の目的】 人工関節感染は重篤な合併症の一つである。我々はこれまでに銀含有ハイドロキシアパタイト（銀 HA）溶射技術を開発し、その抗菌効果や骨誘導能などを研究してきた。しかし銀イオンは優れた抗菌性と同時に濃度依存的に生体毒性を示すと言われている。今回ラット脛骨モデルを用いて、銀 HA の in vivo での生体安全性を評価した。</p> <p>【方法】 試験片は、純チタン棒に添加率 0wt%、2wt%、50wt%で酸化銀を添加したハイドロキシアパタイトを溶射して作製した（HA、2%銀 HA、50%銀 HA）。10 週齢の雄 SD ラットの両脛骨骨髓内に試験片を 1 本ずつ挿入し、術後 2、3、4 日（急性期）及び 4、8、12 週（亜急性期）時点で銀濃度（血液、臓器）および血清生化学データを測定した。また各臓器の組織学的観察も行った。</p> <p>【結果】 血液中の平均銀濃度は、2%銀 HA、50%銀 HA 共に急性期でピークを認め、その後漸減した。全期間で 50%銀 HA が有意に高かったが、2%銀 HA は全期間で HA と有意差を認めなかった。各臓器の平均銀濃度は、4-8 週ではいずれも 50%銀 HA が他の 2 群に比べて有意に高かったが、12 週では全臓器で 3 群間に有意差を認めなかった。全期間、全臓器で HA と 2%銀 HA 間に有意差を認めなかった。また全群で銀による明らかな生化学データの異常は認めず、組織学的異常所見も認めなかった。</p> <p>【考察】 銀 HA は 2wt%程度の低い銀濃度であれば、HA と同等の安全性をもつインプラントと考えられ、人工関節感染予防の一助となると考えられた。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	前田 寿幸
<p>[論文題名] Comprehensive and quantitative multilocus methylation analysis reveals the susceptibility of specific imprinted differentially methylated regions to aberrant methylation in Beckwith-Wiedemann syndrome with epimutations.</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Genetics in Medicine, advance online publication 8 May 2014</p> <p>著者名 Maeda T, Higashimoto K, Jozaki K, Yatsuki H, Nakabayashi K, Makita Y, Tonoki H, Okamoto N, Takada F, Ohashi H, Migita M, Kosaki R, Matsubara K, Ogata T, Matsuo M, Hamasaki Y, Ohtsuka Y, Nishioka K, Joh K, Mukai T, Hata K, Soejima H.</p> <p>[要 旨] (研究の目的) インプリント遺伝子の発現は、DMR (メチル化可変領域) の DNA メチル化により制御されている。Beckwith-Wiedemann 症候群 (BWS) は、11p15 の KvDMR1 低メチル化あるいは H19DMR の高メチル化で発症するインプリンティング疾患である。近年、BWS 症例で 11p15 以外の DMR にメチル化異常が生じるマルチメチル化異常が注目されているが、包括的な解析は少なく、DMR 毎のメチル化異常の起こりやすさ、メチル化異常による遺伝子発現変化やマルチメチル化異常の原因については不明のままである。</p> (方法) 11p15 のメチル化異常を認める BWS 患者 54 例について、MALDI-TOF MS と pyrosequencing を用いて 29 カ所の DMR のメチル化を包括的・定量的に解析した。メチル化異常を認めた DMR については、遺伝子発現解析、変異解析を行った。 (結果) KvDMR1 低メチル化群の 34%、H19DMR 高メチル化群の 30% にマルチメチル化異常を認めた。KvDMR1 低メチル化群では、maternal methylated DMR がメチル化異常の標的となっていた。遺伝子発現は DMR のメチル化異常に伴い変化していたが、変異解析では明らかな変異は認めなかった。 (考察) KvDMR1 低メチル化は着床前に生じるが、この時期は maternal methylated DMR でもメチル化異常が起こりやすいと考えられた。DMR のメチル化異常が遺伝子発現に影響していることを確認したが、マルチメチル化異常の原因となる変異は特定できなかった。 (結論) 我々の知見は、マルチメチル化異常のメカニズムを理解する上で有用なものであると考えられた。			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	合島 怜央奈
<p>[論文題名]</p> <p>The thermosensitive TRPV3 channel contributes to rapid wound healing in oral epithelia</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 The FASEB Journal, in press</p> <p>著者名 Reona Aijima, Bing Wang, Tomoka Takao, Hiroshi Mihara, Makiko Kashio, Yasuyoshi Ohsaki, Jing-Qi Zhang, Atsuko Mizuno, Makoto Suzuki, Yoshio Yamashita, Sadahiko Masuko, Masaaki Goto, Makoto Tominaga, Mizuho A. Kido</p> <p>[要 旨]</p> <p>【目的】 口腔は多様な刺激に曝されており損傷が生じやすい。一方で、口腔上皮は再生力が高く皮膚よりも速やかな創治癒を経ることが知られている。しかし、そのメカニズムについては不明な点が多い。本研究では 33℃以上の温かい温度で活性化される transient receptor potential vanilloid 3 (TRPV3) チャンネルが口腔粘膜における速やかな創治癒へ関与すると仮定し検討を行った。</p> <p>【方法】 C57BL/6 (WT) および TRPV3 遺伝子欠損 (TRPV3KO) マウスを用いリアルタイム PCR、ウエスタンブロッティング、免疫染色および電気生理学的手法にて解析した。</p> <p>【結果】 マウス口腔上皮には温度感受性 TRP チャンネル群が発現し、温度感受性 TRP チャンネルの中で TRPV3 の発現が顕著であった。培養系では口腔上皮細胞における TRPV3 の発現は皮膚上皮細胞より多かった。急性単離した口腔上皮細胞へ温度刺激を加えると TRPV3 を介した細胞内カルシウムの上昇および電流応答を認めた。マウス上顎第一臼歯の抜歯創傷モデルでは創部において TRPV3 の発現が上昇しており、TRPV3KO の創傷治癒は WT より遅延していた。TRPV3KO マウスの口腔粘膜では WT と比較して上皮成長因子受容体のリン酸化が低下し、細胞増殖マーカーが減少していた。また、培養口腔上皮細胞の TRPV3 活性化により細胞数および細胞増殖マーカー陽性細胞数が増加した。</p> <p>【考察・結論】 口腔粘膜には口腔内の温かい温度を感知する機能的な TRPV3 チャンネルが発現し、上皮細胞の増殖を促進することで粘膜創傷の速やかな治癒をもたらすことが示唆された。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	隅 康二
<p>[論文題名] Generational differences in tooth size in the Japanese population: Analysis of cohorts with a generation gap of four to five decades</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Fukuoka Acta Medica, in press</p> <p>著者名 Koji Sumi, Yoshinori Kawakubo, Yoshio Yamashita, Masaaki Goto, Akio Kuraoka</p> <p>[要 旨]</p> <p>【目的】近代以降、ヒトの歯のサイズが世代とともに大きくなっていると報告されてきた。歯の大型化は、不正歯列や咬合異常など様々な問題を引き起こす要因となっている可能性があり、この変化に関する詳細な分析は病態解明の観点からも重要である。本研究の目的は、最も新しい世代のデータを用いて日本人の歯の時代変化を検証することである。</p> <p>【方法】1980-1990年代生まれの若年者集団と、誕生年に50年余りの差がある1940年代生まれの若年者集団の歯列石膏模型につき、歯冠近遠心幅径を計測し統計解析を行った。</p> <p>【結果】歯種別に平均値の差を検定した結果、半数以上の歯種において若い世代群の歯のサイズが大きくなっていることが明らかになった。偏差折線による分析では、増加の程度には歯種間の、あるいは資料が収集された地域間のばらつきがあることが示唆された。主成分分析では、若い世代における個体レベルの歯のサイズ増大が明らかになった。</p> <p>【考察】歯のサイズの増大は環境の変化の影響と思われるが、影響の受け易さには歯種による差や地域による差があると思われた。また歯列や咬合の異常をもたらす背景として考慮されるべき現象と推察された。</p> <p>【結論】本研究によって、日本人の歯のサイズは世代間で異なり、大型化しつつあることが明らかになった。この結果は、近年の日本人にしばしば発生する歯列異常や咬合異常の原因を理解する上で、有益な基礎データと考えられる。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	加藤 剛
<p>[論文題名]</p> <p>Beta2 Adrenergic Agonist Attenuates House Dust mite-induced Allergic Airway Inflammation through Dendritic Cells</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 BMC Immunology 15:39, 2014,</p> <p>著者名 Go Kato, Koichiro Takahashi, Hiroki Tashiro, Keigo Kurata, Hideharu Shirai, Shinya Kimura and Shinichiro Hayashi</p> <p>[要 旨]</p> <p>背景 長時間作用型β2 アドレナリン受容体作動薬 (LABA) は喘息の治療薬として用いられている。これまで LABA が気管支喘息に対して抗炎症作用をもつことを示唆する報告はあったが、詳細は不明な点が多かった。LABA が気道炎症に対してどのような機序で抗炎症効果をもつのかを検討した。</p> <p>方法 LABA の抗炎症効果について、House dust mite (HDM) 粗抽出液を用いて感作・暴露を行ったマウスモデルを用いた。気道炎症の初期段階に関与する樹状細胞からのサイトカイン産生をみるために、骨髄由来の樹状細胞(BMDC)を培養し、HDM で刺激した。樹状細胞の気管内移入モデルとして、樹状細胞を HDM で刺激し経気道的にマウスに投与した。</p> <p>結果 HDM マウスモデルにおいて、LABA の投与により、HDM で惹起される BAL 中炎症細胞や肺組織および所属リンパ節中のサイトカイン産生は抑制された。BMDC を HDM で刺激した場合 IL-6、IL-23 が増加したが、LABA によりその増加が抑制された。また、HDM で刺激を行うと IL-10 が抑制されたが、LABA とともに刺激を行うと IL-10 産生の抑制は認めなかった。HDM で刺激を行った BMDC を気管内に移入を行うと、刺激しない場合と比較して気管支肺胞洗浄液中の炎症細胞の増加を認めたが、LABA とともに刺激を行うと抑制された。</p> <p>考察 LABA は樹状細胞に作用し、Th2、Th17 リンパ球系の炎症反応を抑制し、気道炎症を抑制することが示唆された。</p> <p>結論 LABA は気管支拡張作用のみではなく樹状細胞に直接作用し、気管支喘息の気道炎症に対して免疫調整に関与することが示唆された。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	川崎 東太
<p>[論文題名]</p> <p>The effect of different positions on lower limbs skin perfusion pressure.</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Indian Journal of Plastic Surgery, 46(3), 508-512, 2013</p> <p>著者名</p> <p>Tota Kawasaki, Tetsuji Uemura, Kiyomi Matsuo, Kazuyuki Masumoto, Yoshimi Harada, Takahiro Chuman, Tomoyuki Murata</p> <p>[要 旨]</p> <p>【目的】 臨床の場で重症虚血肢患者がベッドから下肢を下垂させている場面に遭遇することがある。これは下肢末端の虚血によって生じる疼痛を回避するための行動と理解されている。しかしながら、この下肢をベッドから下垂させた肢位が、下肢の末梢血流にどのように影響しているのかはわかっていない。そのため、本研究ではベッド上での肢位が下肢の末梢皮膚灌流圧 (SPP) にどのような影響を及ぼすのかを検討した。</p> <p>【方法】 対象者は健常成人 10 名, 下肢重症虚血肢 (CLI) 患者 11 名, 計 42 肢を対象に実施した。SPP は背臥位, 20° 背上げ, 下肢挙上位, ベッド上端座位の合計 4 肢位でそれぞれ測定した。</p> <p>【結果】 ベッド上端座位は, 健常成人, CLI 患者共に他の 3 つの肢位と比較して, SPP 値は有意に高い値を示した。また, 健常者では背臥位と背上げ位, 背臥位と下肢挙上位間で有意差が認められたが, CLI 患者では有意差は認められなかった。</p> <p>【考察】 今回の結果より, 端座位は CLI 患者にとっても下肢の末梢皮膚灌流圧を上昇させるために有効な肢位であることがわかった。しかし, CLI 患者においては動脈系だけでなく静脈系の還流も障害されている場合が多いため, CLI 患者の長時間の端座位は静脈灌流圧の低下をもたらし, 浮腫などの末梢循環不全を引き起こす可能性が高いため, 注意が必要になる。</p>			

備考 1 論文要旨は, 600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は, 研究の目的, 方法, 結果, 考察, 結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	佐藤 弥生
<p>[論文題名] IL-27 affects helper T cell responses via regulation of PGE₂ production by macrophages</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁-頁, 発行西暦年 Biochemical and Biophysical Research Communications, 451,215-221,2014</p> <p>著者名 Yayoi Sato, Hiromitsu Hara, Toshiaki Okuno, Naoko Ozaki, Shinobu Suzuki, Takehiko Yokomizo, Tsuneyasu Kaisyo, and Hiroki Yoshida,</p> <p>[要 旨]</p> <p>【目的】 マクロファージにおける IL-27 による制御を介したサイトカイン以外のメディエーターによるヘルパーT細胞免疫制御機構の解明。</p> <p>【方法】 IL-27 受容体欠損マウス (WSX-1^{-/-}) またはコントロールマウス(C57BL/6)骨髄由来マクロファージ(BMDM)の培養上清 (LPS 刺激) で T 細胞を刺激、4 日後に上清を回収し、IFN-g, IL-17 の産生を ELISA 法にて測定した。 LPS 刺激 20 時間後の BMDM 上清を回収し、PGE₂ 産生を HTRF 法にて測定した。さらに、RT-PCR 法にてプロスタグランジン (PGs) 合成経路の主要な因子の発現を検討した。IL-27/WSX-1 シグナルの下流を解明するため、マクロファージ様培養細胞 RAW264.7 に mouse WSX-1(mWSX-1)を強発現する mWSX-1-RAW267.4 を樹立、また、WSX-1 の下流因子と推測される STAT1, STAT3 の siRNA を導入した RAW264.7 および STAT-1^{-/-} BMDM を用い、シグナル伝達経路解明のための実験を実施した。</p> <p>【結果】 WSX-1^{-/-} BMDM の培養上清 (LPS 刺激) で刺激された T 細胞は、コントロールと比較し有意に IFN-g, IL-17 の産生が増加した。また、WSX-1^{-/-} BMDM の培養上清は、PGE₂ 産生の増加が認められ、HPLC 法においても増加が確認された。RT-PCR による PGs 合成経路関連分子発現検討により、COX-2 発現増加が認められた。さらに、COX-2 阻害剤により PGE₂ 産生は阻害された。mWSX-1-RAW267.4 では、親細胞と比較し PGE₂ 産生が減少した。siSTAT1-RAW264.7 では、COX-2 発現増加および PGE₂ 産生の増加が認められた。STAT-1^{-/-} BMDM においても同様であった。</p> <p>【考察・結論】 マクロファージでは、IL-27/WSX-1/STAT1 シグナルを介する COX-2 発現制御により PGE₂ 産生が制御され、さらに PGE₂ がヘルパーT細胞からのサイトカイン産生を制御することが示唆された。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	松島 淳
<p>[論文題名] Association of inflammatory biomarkers with depressive symptoms and cognitive decline in a community-dwelling healthy older sample: a 3-year follow-up study</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁-頁, 発行西暦年 Journal of Affective Disorders</p> <p>著者名 <u>Jun Matsushima</u>, Toshiro Kawashima, Hiromi Nabeta, Yoshiomi Imamura, Itaru Watanabe, Yoshito Mizoguchi, Naoki Kojima, Shigeto Yamada, Akira Monji</p> <p>[要 旨] 【目的】本研究では健常高齢者における炎症マーカーとうつ状態と認知機能との関連をみることを目的として横断的かつ縦断的な検討を行った。 【方法】佐賀県伊万里市黒川町に在住する65歳以上の認知症ではない高齢者64名を対象にベースライン(2004~2006年)と三年後(2007~2009年)に調査を実施した。その際に、炎症マーカー(IL-1β、IL-2、IL-6、可溶性IL-2受容体、可溶性IL-6受容体、高感度CRP、TNF-α)に関しては血清検体を用いて評価し、うつ状態の評価にはBDI-II、認知機能の評価にはMMSE、FAB、CDTを用いた。 【結果】横断的検討では男性においてのみ可溶性IL-2受容体がMMSEのスコアと関連があることが分かった。一方で、縦断的検討ではいずれの炎症マーカーもうつ症状や認知機能との関連はみられなかった。 【考察】関連する既報告からは炎症マーカーがうつ症状や認知機能低下の予測因子になることが示唆されているが、今回の調査では炎症マーカーの値がいずれも低値であり健常者を対象としたことが影響しているものと考えられる。 【結論】本研究は、地域在住の健常高齢者において可溶性IL-2受容体が現在の認知機能の状態と関連することを示唆する一方で、いずれの炎症マーカーも健常高齢者の将来のうつ症状や認知機能低下を予測するものではないことが示唆された。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	山口 太輔
<p>[論文題名]</p> <p>Characteristics of patients with non-variceal upper gastrointestinal bleeding taking antithrombotic agents (抗血栓薬服用中における非静脈瘤性上部消化管出血患者の特徴)</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年</p> <p>Digestive Endoscopy, Published online: 17 Sep 2014 DOI:10.1111/den.12316</p> <p>著者名</p> <p>Daisuke Yamaguchi, Yasuhisa Sakata, Nanae Tsuruoka, Ryo Shimoda, Toru Higuchi, Hiroyuki Sakata, Kazuma Fujimoto and Ryuichi Iwakiri (山口太輔、坂田資尚、鶴岡ななえ、下田良、樋口徹、坂田祐之、藤本一眞、岩切龍一)</p> <p>[要 旨]</p> <p>目的：この研究は抗血栓薬服用中に緊急内視鏡を要した非静脈瘤性上部消化管出血患者(UGIB)の特徴と抗血栓薬服用法を明らかにすることを目的とした。</p> <p>方法：対象は2002年から2013年に当院で緊急内視鏡を要したUGIB患者560例。抗血栓薬服用群(Group A)と非抗血栓薬服用群(Group NA)に分類し、患者背景、原因疾患など比較検討を行った。また2012年に日本内視鏡学会より刊行された「抗血栓薬服用者に対する消化器内視鏡診療ガイドライン」前後における抗血栓薬休薬期間などを検討した。</p> <p>結果：UGIB患者の中で抗血栓薬を服用していた患者は27.5%であり、増加傾向にあった。患者背景として、Group Aは高齢で、入院時ヘモグロビン値は低値であった。UGIBの原因疾患としては消化性潰瘍が最も多く、Group Aは胃病変、多発潰瘍、Forrest Ib、IIa群の湧出性出血が特徴的であり、内視鏡的止血率はGroup Aの方が高かった。またガイドライン導入後に抗血栓薬休薬期間は有意に短縮され、偶発症は認めなかった。</p> <p>考察、結論：UGIBにおける抗血栓薬内服患者は、高齢で貧血が進行している症例も多いが、輸血を必要としない止血可能な湧出性出血症例が多かった。止血術後の休薬期間の短縮は治療成績には影響しておらず、血栓塞栓症予防のための休薬期間の短縮はUGIB治療時においても妥当であると考えられた。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	阿部 一之
[論文題名]			
Optimization of inversion time for postmortem fluid attenuated inversion recovery (FLAIR) MR imaging at 1.5 Tesla: temperature-based cerebrospinal fluid suppression			
1.5T死後MRIにおけるfluid attenuated inversion recovery(FLAIR)撮像法の最適化 - 温度補正による脳脊髄液の信号抑制-			
雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年			
Magnetic Resonance in Medical Sciences, in press			
著者名			
Kazuyuki Abe, Tomoya Kobayashi, Seiji Shiotani, Hajime Saito, Kazunori Kaga, Kazuya Tashiro, Satoka Someya, Hideyuki Hayakawa, and Kazuhiro Homma			
[要 旨]			
目的			
死後脳MRIのFLAIR撮像法で脳脊髄液(CSF)の信号強度(SI)が抑制不良となり、画像診断が困難になる。本研究の目的は、死後脳MRIのFLAIR撮像法で脳脊髄液(CSF)のSIが抑制されるようにinversion time(TI)値を最適化することである。			
方法			
死後(3~113)時間経過の28症例を1.5TMRI装置で撮像した側脳室前角に関心領域を設定してCSFのT1値測定と撮像直後に直腸温度(RT)を測定した。統計的にピアソンの相関係数によって分析し、RTとT1値との回帰式を求め、FLAIR撮像法のTI値を算出し、CSFのSIが抑制されるかを確認した。			
結果			
CSFのT1値とRTの間に有意な正の相関があった(R=0.96)。1.5TでのT1値とRTの関係式は $T1 = 74.4 \times RT + 1813$ が得られ、最適なTI値は $TI = 0.693 \times (74.4 \times RT + 1813)$ が求められ、実際の症例でもCSFのSIが抑制された。			
考察			
生体と死後のCSFのT1値の差は温度やCSF中の脈動、酸素温度も関係する。死後脳MRIについてFLAIR撮像法の最適なTI値は、 $TI = 0.693 \times (74.4 \times RT + 1813)$ の関係式が求められたが、静磁場強度が異なるとTI値算出の関係式も異なるため検討が必要である。			
結論			
死後脳MRIのFLAIR撮像法において、RTを用いてTI値を最適化することで、CSFの十分なSI抑制を達成することができた。			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	梅口 仁美
<p>[論文題名] Usefulness of plasma HGF level for monitoring acquired resistance to EGFR tyrosine kinase inhibitors in non-small cell lung cancer.</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Oncology Reports,33(1),391-6,2015</p> <p>著者名 梅口仁美、荒金尚子、小林直美、中村朝美、佐藤明美、武田雄二、林真一郎、末岡栄三郎、木村晋也</p> <p>[要 旨] EGFR チロシンキナーゼ阻害剤 (EGFR-TKI) の主要な獲得耐性機序として、<i>EGFR</i> T790M 変異、Hepatocyte growth factor (HGF) 高発現が報告されている。我々はこれまで高感度全自動 T790M 検出系である mutation-biased PCR and quenched probe system (MBP-QP) 法を開発し、血漿遊離 DNA を用いた T790M 検出の有用性について報告してきた。 今回は、もう一つの主要獲得耐性機構である HGF 高発現を、ELISA 法による血漿 HGF 値測定で反映できるか検討した。 225 例の肺癌患者血漿 315 検体を用いて血漿 HGF 値を測定し、臨床病理学的背景との関連を検討した。中央値は 140 pg/ml で、喫煙者、進行病期で高い傾向を認め、独立した予後不良因子であった。EGFR-TKI 獲得耐性例 16 例については、投与前 HGF が症例間で差が見られたため投与前後の比で検討した。血漿 HGF 値が治療開始前の 1.5 倍以上に上昇したのは 6 例 (38%)、血漿 T790M 陽性は 9 例 (56%) 認め、血漿 HGF 値上昇かつ T790M 変異陽性は 4 例 (25%) であった。EGFR-TKI 獲得耐性時には 69% で血漿 HGF 値上昇あるいは T790M 変異陽性を認めた。 血漿を用いた HGF 値、T790M 変異検査は、非侵襲的であるため頻回の検査が可能であり、その時々々の分子病態を反映できる事が利点である。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	坂田奈津子
<p>[論文題名]</p> <p>Repeated Screening with Fecal Immunochemical Tests Reduced the Incidence of Colorectal Cancers in Saga, Japan</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Hepato-Gastroenterology, 61, 1224-1228, 2014</p> <p>著者名 Natsuko Sakata, Yasuhisa Sakata, Ryo Shimoda, Hiroyuki Sakata, Ryuichi Iwakiri, Kazuma Fujimoto, Masanobu Mizuguchi, Hiroyuki Irie, Yuichiro Shimoda, and Hirokazu Noshiro</p> <p>[要 旨]</p> <p>目的：大腸癌による死亡率は世界的に増加しており、日本でも増加している。日本では大腸癌検診として、簡便な免疫学的便潜血検査が用いられている。本研究は免疫学的便潜血検査による検診を逐年受診することが大腸癌の発見に有用であるかを検討した。</p> <p>方法：2005年から2007年に佐賀県にて免疫学的便潜血検査（2日法）による大腸癌検診を受診した40歳以上、55,595名を対象とした。検査にて陽性と診断された者は下部消化管内視鏡検査による精密検査を行った。陽性者は逐年受診者と初回受診者に分け、大腸癌の発生率の統計学的解析を行った。</p> <p>結果：対象者55,595名のうち、逐年受診者47,168名、初回受診者は8,427名であった。全体で5,832名が便潜血陽性となり、114名（早期癌67名、進行癌47名）が大腸癌と診断された。逐年受診者における大腸癌の発生率は初回受診者と比較し、63%の低下を認めた。さらに、逐年受診者では、侵襲の少ない内視鏡的切除術の割合が高かった。また、検診による大腸癌発見者は、症状を有し、大腸癌と診断された者と比較し、5年生存率は有意に高かった。</p> <p>考察：日本では進行度の低い大腸癌の5年生存率は良い。そこで、便潜血検査を用いた検診における大腸癌の早期発見が大腸癌の死亡率を減少させることにつながると考えられた。</p> <p>結論：免疫学的便潜血検査法は大腸癌検診逐年受診者において大腸癌の発生率を低下させた。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	久保 洋
<p>[論文題名] Regulation and clinical significance of the hypoxia-induced expression of ANGPTL4 in gastric cancer</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Oncology Letters, in press</p> <p>著者名 Hiroshi Kubo, Yoshihiko Kitajima, Keita Kai, Jun Nakamura, Shuusuke Miyake Kazuyoshi Yanagihara, Kiyoto Morito, Tomokazu Tanaka, Masaaki Shida, Hirokazu Noshiro</p> <p>[要 旨]</p> <p>【目的】 固形癌には低酸素領域が存在し、低酸素誘導因子 (HIF-1α) がさまざまな下流の遺伝子を誘導することで各種癌細胞は高悪性度を呈する。ここで angiopoietin family の一つである ANGPTL4 は低酸素誘導遺伝子と知られている。本研究では胃癌における ANGPTL4 と HIF-1αの関連および ANGPTL4、HIF-1αの発現と臨床病理学的因子との関連を検討した。</p> <p>【方法】 10 種類の胃癌細胞株および当教室で樹立した HIF-1α knock down 株、control 株を用いて ANGPTL4 の発現を解析した。また 170 の胃癌組織標本を用いて免疫組織学的解析により、ANGPTL4 と HIF-1αの発現と臨床病理学的因子および生存率について解析した。</p> <p>【結果】 胃癌細胞株において低酸素状態で ANGPTL4 の発現を確認できた。また ANGPTL4 の発現は HIF-1α knock down の影響を受けなかった。免疫組織学的解析では ANGPTL4 の発現と癌の深達度は逆相関を示し、ANGPTL4 の発現は優位に生存率を延長させた。</p> <p>【結語】 ANGPTL4 の低酸素誘導発現は HIF-1αを介する経路だけではないことが示唆された。また胃癌の進展過程において ANGPTL4 と HIF-1αの発現は相反する作用を示し、ANGPTL4 は予後良好因子、HIF-1αは予後不良因子となりうることを示唆された。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	樋口徹
<p>[論文題名] Low-dose aspirin and comorbidities are significantly related to bleeding peptic ulcers in elderly patients compared with nonelderly patients in Japan.</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 INTERNAL MEDICINE, 53(5), 367-73, 2014</p> <p>著者名 Higuchi T, Iwakiri R, Hara M, Shimoda R, Sakata Y, Nakayama A, Nio K, Yamaguchi S, Yamaguchi D, Watanabe A, Akutagawa T, Sakata H, Fujimoto K.</p> <p>[要 旨] 目的: この研究は高齢者における出血性胃十二指腸潰瘍の特徴を明らかにする事を目的とした。 方法: 対象は1999年から2011年までに内視鏡的止血術を施行した461例。男性327名、女性134名で平均年齢は62.9±16.8歳。65歳以上の高齢者231名と、64歳以下の若年者230名とで比較検討した。高齢者では81歳以上の超高齢者でも検討した。前期(1999~2005年)の65歳以上の高齢患者は100名と、後期(2006~2011年)の65歳以上の高齢患者は131名での比較も施行した。 結果: 若年者と比較して高齢者では、ピロリ菌陽性潰瘍の比率低下、女性比率の増加、入院時Hb値の低値、基礎疾患合併率の増加、薬剤服用率(低用量アスピリン、抗血栓薬、ステロイド)増加が特徴的だった。81歳以上の超高齢者でも同様であった。内服薬が高齢者の潰瘍の危険因子になるか解析すると低用量アスピリンが危険因子との結果となった。前期と後期で比較すると後期では、患者数増加、ピロリ菌陽性比率低下、低用量アスピリン内服率の増加傾向が特徴的だった。 考察、結論: 高齢者の出血性胃十二指腸潰瘍は増加しつつある。発症原因もピロリ菌関連から低用量アスピリンを内服している心疾患や脳血管疾患を基礎疾患にもつ事によるものへ変化してきている。高齢者の出血性胃十二指腸潰瘍患者は適切な管理を行えば、若年者同様に治療を行うことが可能である。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	森戸 清人
<p>[論文題名]</p> <p>The value of trefoil factor 3 expression in predicting the long-term outcome and early recurrence of colorectal cancer</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 International Journal of Oncology, in press</p> <p>著者名 Kiyoto Morito, Jun Nakamura, Yoshihiko Kitajima, Keita Kai, Tomokazu Tanaka, Hiroshi Kubo, Shuusuke Miyake, Hirokazu Noshiro</p> <p>[要 旨]</p> <p>【目的】 Trefoil factor (TFF) family は TFF1～3 のサブタイプから成り、消化管粘膜の防御・修復に関与している。一方、TFF は様々な癌において、発癌や進展に関わっていると報告されているが、結腸直腸癌における TFF の臨床的意義は不明である。本研究は、結腸直腸癌患者における TFF 発現と臨床病理学的因子、生存率との関係を検討した。</p> <p>【方法】 2005 年 1 月～2007 年 12 月に当科で原発巣切除を受けた結腸直腸癌患者 154 人を対象とした。切除組織を用い TFF1～3 の mRNA 発現を解析し、臨床病理学的因子および生存率との関係を検討した。</p> <p>【結果】 TFF1 と 2 に関しては、今回、臨床的意義を見出すことはできなかった。TFF3 においては、TFF3 陰性例と比較して TFF3 陽性例で遠隔転移を高頻度に認めた。生存解析では、TFF3 陽性例は陰性例と比較して予後不良であり、多変量解析において、TFF3、リンパ節転移、脈管侵襲が独立予後不良因子として抽出された。さらに、手術時に遠隔転移のない 134 例の解析で、TFF3 陽性例は 1 年以内の早期再発を高頻度に認めた。</p> <p>【考察】 最近、TFF3 とリンパ節転移や肝転移との関連が報告されている。本研究においても TFF3 は遠隔転移と関連しており、また、早期再発のマーカーとしての可能性も示された。以上、TFF3 は結腸直腸癌の転移能に関わっている可能性が示唆された。</p> <p>【結論】 TFF3 は結腸直腸癌患者の予後不良因子としてだけでなく、早期再発のバイオマーカーとなる可能性がある。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	濱田 維子
<p>[論文題名]</p> <p>Factors influencing maternal acceptance of human papillomavirus vaccination for their school-aged daughters in Fukuoka Prefecture, Japan</p> <p>雑誌名 British Journal of Medicine and Medical Research, in press</p> <p>著者名 Yukiko Hamada, Miyuki Nagamatsu, Takeshi Sato</p> <p>[要 旨]</p> <p>目的：学齢期の娘を持つ母親において、娘の HPV 予防接種の受容に影響する要因を明らかにする。</p> <p>方法：13-16 歳の娘を持つ母親 (n=1407) を対象に無記名自記式質問紙法による横断調査を行った。調査の内容は、娘の HPV 予防接種状況、子宮頸がん・HPV に関する知識、HPV ワクチン・予防接種全般に対する意識、娘との子宮頸がんに関する会話の有無で構成した。母親への質問紙の配布・回収は、2012-2013 年の期間に、中学校と高等学校にて生徒を介して行った。娘のワクチン接種状況に関連する変数を抽出した後、多重ロジスティック回帰分析を行った。</p> <p>結果：娘の HPV 予防接種に関連する母親の因子は、影響力の強い順に、HPV 無料接種を重視する意識 (OR,9.26; 95%CI,3.42-25.0)、予防接種全般に対する親としての義務感 (OR,4.65; 95%CI,2.30-9.43)、ワクチンの効果に対する信頼 (OR,3.91; 95%CI,2.41-6.34)、予防接種に対する政府の対応への信頼 (OR,2.40; 95%CI,1.49-3.86)、娘との子宮頸がんに関する会話 (OR,2.04; 95%CI,1.28-3.22)、ワクチンの安全性に対する信頼 (OR,1.81; 95%CI,1.04-3.15)、子宮頸がんへの脅威 (OR,1.80; 95%CI,1.14-2.84)、HPV ワクチンに対する知識 (OR,1.23; 95%CI,1.06-1.43) の 8 つだった。</p> <p>考察：母親における受動的な意識が、娘への HPV 予防接種に影響していることが明らかになり、予防知識・情報に基づいた自己決定が行われていない状況が推測された。</p> <p>結論：学齢期女子の HPV 予防接種は、公費助成による無料接種、親としての義務感という母親の受動的な要因に促進されていた。HPV 予防接種という一視点からだけではない、子宮頸がん予防教育の必要性が示唆された。</p>			

- 備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。
- 2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 号	氏 名	横尾 眞子
<p>[論文題名]</p> <p>Comparative study of the anti-leukemic effects of imatinib mesylate, Glivec™ tablet and its generic formulation, OHK9511 メシル酸イマチニブのグリベックとそのジェネリック製剤 OHK9511 の薬効比較試験</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Biological and Pharmaceutical Bulletin, in press</p> <p>著者名 Masako Yokoo, Yasushi Kubota, Yoko Tabe, Shinya Kimura</p> <p>[要 旨]</p> <p>[目的]メシル酸イマチニブ(IM)の登場により、慢性骨髄性白血病(CML)患者の生存期間は飛躍的に延長した。しかし薬価は高額であるため、服薬アドヒアランスが低く、CML再燃や薬剤耐性をきたすことがある。現在、医療費軽減目的に、後発医薬品(ジェネリック医薬品)の使用が推奨されている。日本では、原末と化学構造が同じで生物学的同等性が証明されれば、先行薬剤と同等の安全性と有効性を持つものとして承認される。したがって、実際の対象疾患に対する有効性や忍容性が先行薬剤と同等かは販売時点では明らかではなく、実際にその有効性を疑問視する報告も多々ある。本研究では、メシル酸イマチニブの先発医薬品グリベック™と、そのジェネリック製剤であるOHK9511の抗白血病効果についての治療効果比較試験を<i>in vivo</i>および<i>in vitro</i>で行った。[方法]白血病細胞株に対し、まず2剤のIC₅₀とアポトーシス誘導能を比較し、次にCMLモデルマウスにそれぞれを投与し、生存期間を比較した。[結果]グリベック錠とOHK9511はCML細胞株に対するIC₅₀値やアポトーシス誘導能はほぼ同等であった。動物実験モデルにおいても、生存期間に有意差はみとめなかった。[結論]CML細胞に対してOHK9511はグリベック™と同等の有効性を持つことが示された。基礎的な実験だが、ジェネリック医薬品の有効性を担保する重要な結果である。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。